法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-05-31

民間地図作製史からみたフロンティア像の日露比較研究

KOMEIE, Shinobu / 米家, 志乃布

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費助成事業 研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
5
(発行年 / Year)
2021-06-07

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０３２５７

研究課題名（和文）民間地図作製史からみたフロンティア像の日露比較研究

研究課題名（英文）A comparative study of representation of frontier on Japanese and Russian private publishing maps.

研究代表者
米家　志乃布（KOMEIE, SHINOBU）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：３０２７２７３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本とロシアにおける民間地図出版史をおさえ、それらの刊行地図やアトラス類において描かれたフロンティア像を明らかにすることを目的とした。その際、地図の出版は、それぞれの首都において行われたことを踏まえ、フロンティアだけでなく、ロシア帝国と近代日本の都市表象の在り方についても考察を広げた。特に江戸から明治東京における都市図の作成や出版状況を把握し、19世紀日本の地域像構築は、フロンティアおよび中央の両方において、近代的な測量図だけでなく、鳥瞰図や景観画などの絵画表現も重要であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、歴史地理学における地図史研究の方法を用いて、日本・ロシアにおける過去の人々が持っていた地域像・フロンティア像を考察することに主眼がある。本研究の成果により、地図だけでなく、地図に類似した絵図・鳥瞰図や景観図なども人々の認識に大きな役割を果たしたことが明らかになった。また過去の日本人とロシア人の地域認識は、現代の両国の地域認識にもつながる。両国にとって共通のフロンティアでもある北方領土問題や東京やモスクワなどの首都の在り方にも影響を及ぼすと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine the history of private map publishing in Japan and Russia, and to clarify the frontier images drawn on those maps and atlases. At that time, based on the fact that the map was published in each capital, we expanded our consideration not only to the frontier but also to the ideal urban representation of Imperial Russia and modern Japan. In particular, grasping the creation and publication status of city maps from Edo to Meiji Tokyo, it is important not only modern maps but also pictorial expressions such as bird's-eye views and landscape drawings in both the frontier and central areas to build a regional image of 19th century Japan.

研究分野：歴史地理学

キーワード：近代日本　ロシア帝国　都市図　フロンティア　地域像　江戸東京　アトラス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ロシアの地図史研究においては、帝政期のロシア科学アカデミーや地理学協会によるロシア国土図やシベリアや中央アジア、カフカスなどの辺境図、ロシア陸軍・参謀本部による国土や地域の測量図など、ロシアの国家機関で作製された様々な地図については、この分野の第一人者であるポスニコフによる一連の研究がある（たとえばポスニコフ（1989）:『ロシアにおける大縮尺地図の発展』（露語）、ポスニコフ（1996）:『ロシア図：わたしたちの国土の地理的研究と地図学』（露語）など多数）。しかし、ロシア地図史においては、民間で流布した出版地図そのものについては、ほとんど注目されていない。

帝政ロシアの首都であり、文化・学術の中心地でもあったサンクトペテルブルクでは、数多くの地図が出版された。もちろん、ロシア地理学協会や参謀本部の地図は数多く出版されているが、民間の地図作製・出版業者による地図も存在した。前述のポスニコフ（1996）の著書の巻末に、ロシアにおける主要な地図作成者や出版者のリストは掲載されているものの、それらの地図の種類や価格などの実態や全貌について不明な点が多い。これらの地図については、すでにロシア国土全体の測量が終了し、正確な国土図・地域図が存在した帝政末期のロシアにおいて、地図情報の流通の実態や社会的役割および意義を考えるうえで重要であるにもかかわらず、ロシア人研究者による民間地図作製史の研究は、ポスニコフがその著書のなかで若干触れているにすぎない。

一方、日本の地図史研究においては、近世日本における民間の日本図に関して、秋岡武次郎（1955）や海野一隆（1999）の日本図に関する研究、近年では上杉和央（2015）:『地図から読む江戸時代』における日本図の出版を紹介したもの、あるいは同（2007）・（2015）による京都図や大阪図といった地域図の出版について詳細な研究もある。また、近代日本ではあるが、中西僚太郎・関戸明子（2008）:『近代日本の視覚的経験』において、人文地理学分野における民間地図の事例研究が進んだ。日本地図史においては、ロシア地図史と比較して、民間で流布した出版地図の研究は進んでおり、これらの成果や方法論を踏まえたうえで、北方地域図の研究を進めることができる。

日本の北方地域（千島・樺太・蝦夷地）を対象とした地図作製については、すでに数多くの研究があり、船越昭生（1976）:『北方図の歴史』をはじめとして、高倉新一郎（1987）による北海道・千島・樺太の古地図集成、秋月俊幸（1999）・高木崇世芝（2011）などによる体系的な日本北方地図史の研究がある。しかし先行研究でも民間の北方図の出版状況や地域像の変容などについては研究が手薄である。

２．研究の目的

本研究では、19 世紀～20 世紀初めにおける日本とロシアの民間地図作製・出版の状況を調査し、それらの地図・アトラス類に、両国のフロンティアがどのように描かれていたのか、各地域像の共通性と異質性を明らかにすることを目的とする。

ロシアにおいては、帝政期の首都サンクトペテルブルクで出版された民間の国土図・地方図・アトラス類に描かれたシベリア・ロシア極東の地域像の検討を行い、日本においては、幕末から明治にかけて江戸・東京で出版された民間の日本図・地域図・アトラス類のなかに描かれた北海道・千島・樺太・シベリアについて検討を行う。日露両国においても、地図出版の文化は首都が中心であり、東京およびサンクトペテルブルクにおける民間作製地図の出版状況も調査し、作製・出版された地図に描かれた地域像を明らかにすることも目的とする。

３．研究の方法

（１）19 世紀半ばにロシアで初めて地図出版の施設をサンクトペテルブルクにつくり、多くの地図・アトラス・アルバム・教科書用の地図帳などを作製・出版したイーリン・アレクセイ・アフィノゲノヴィッチ（1832-1889）およびその息子で、ソ連時代においても地図作製で活躍したイーリン・アレクセイ・アレクセーヴィッチ出版の地図群に着目する。このイリーン工房発行の地図群には、サンクトペテルブルクやモスクワの都市図も多数あるが、ロシア図やシベリア図、さらにアトラス類など多くの地図が存在し、帝政末期からソ連初期にかけての印刷地図の主流であったことが推測される。これらの地図群の全容を把握するために、モスクワおよびサンクトペテルブルクの国立図書館地図部において調査を行い、閲覧し、主要なものは撮影を行う。また、これらの地図群についての記述があれば、その文献のコピーを収集する。

（２）日本国内では、各地で整えられている図書館の地図のデジタルアーカイブを閲覧し、どのような地図が存在するのか、概要を把握する。加えて、札幌および函館の図書館においても史料調査を行う。各史料保存機関のデジタルアーカイブはとても良く整備されているものの、著作権の関係や出版図は手書図に比べて希少価値が低く、いくつかの所蔵機関に共通して所蔵されており、必ずしも HP 上では閲覧できない地図も数多く存在する。これらの地図群については、実際に所蔵機関を訪問して閲覧する必要がある。

４．研究成果

（１）2017 年 8 月にロシア国立図書館の地図部において、19 世紀半ばにロシアではじめて地図の出版施設をつくり、多くのアトラスや出版地図、アルバム、教科書用の地図帳などを作製・出版したイリーン親子の地図群の所蔵調査を行った。その結果、19 世紀末にモスクワの都市図の出版が多く、1890 年・1895 年・1897 年などのものが確認できた。シベリア図や極東図もあり、それらはロシア地理学協会のシベリア支部の探検成果を図示したものである。これらの地図群は、持参したデジタルカメラですべて画像を撮影し、日本に帰ってからデータ整理を行った。

ロシアの地図上におけるフロンティアを論じるうえでは、シベリアや極東といった東方を捉えるのみでは不十分であり、ロシア帝国の版図拡大の状況を踏まえると、西方（ヨーロッパ側）は重要な位置にあるため、その地図作製状況も把握しておく必要があった。そこでヨーロッパ方面の地域像にも目を向けていくため、2018 年 9 月にバルト三国などのロシア帝国の西側の縁辺部において史資料の調査を行った。そこで、各国の首都（タリン・リーガ・ビリニュス）を描いた都市図を、各国の国立図書館地図部および大型書店や古本屋などから収集し、ロシア帝国の領土だった時代にどのように都市が表象されたのか、を検討した。

2019 年 9 月サンクトペテルブルクでは、ロシア国立図書館地図部において、19 世紀半ばにロシアで初めて地図の出版施設をつくり、多くのアトラスや都市図、アルバムや学校用地図帳などを出版したイリーン工房の地図について所在調査を行い、多くの地図を確認した。2017 年 8 月にモスクワのロシア国立図書館地図部で調査を行った際、多くの地図帳やモスクワ図を確認して撮影を行ったが、地図帳（アトラス）だけでなく首都であるペテルブルクの地図も確認できた。

ロシアのフロンティア・首都の出版図に関しては、2019 年度までに調査収集した地図の画像データおよび各地図の情報をパソコンで整理し、研究用のデータベースを作成した。また、20 世紀初めの民間刊行のロシア・アトラスの復刻版も入手し、今後はこれらの調査成果をもとに論文執筆の予定である。

（２）日本での地図の調査研究は、近代日本の首都である東京での地図作製や出版状況を調査した。そこでは、日本における官製地図や民間地図の作製の全体像を把握することに努めた。特に民間地図に関しては本務校である法政大学江戸東京研究センターとの研究活動ともリンクさせ、「都市図から見る東京名所」をまとめた研究報告のなかで、民間地図のなかでも主に都市図に注目した。東京図の刊行点数は日本最多であり、首都を描いて普及させるうえで官製地図よりも出版地図が重要であることが確認できた。

2020 年からは新型コロナウィルスの流行の影響により、最終年度に予定していたロシア・モスクワでの資料・文献収集および学会発表等は断念した。その代わりに、北海道白老町に開館した民族共生空間および国立アイヌ民族博物館へ調査に赴き、最新のアイヌ民族研究に関わる情報を収集した。また、江戸東京の民間刊行地図の分析にあたり、大きな影響を与えた津山藩絵師が描いた江戸鳥瞰図について、岡山県津山市立博物館に調査に行き、資料集を入手した。

日本のフロンティアを描いた出版図・絵図・風景画に関しては、これまでの発表論文を編集し、米家志乃布『近世蝦夷地の地域情報‐日本北方地図史再考』法政大学出版局（2021 年 5 月）としてまとめた。第 3 章において、ロシアとヨーロッパからみた日本北方フロンティアの地図表現を検討し、18 世紀以降、ヨーロッパ・ロシア・日本における科学的な測量技術の発展にともない地球上の土地を正確に計測して描く測量図が作製され、それに伴い彼らの他者への地理的認識は観念から現実へ転換していく。つまりひたすら観念で描くのではなく現実へ近づける工夫をしながら測量図をもとにしたさまざまな編集図が作製されたのである。地図の社会的意義を見る上では正確な地図であるかどうかだけでなく、手書図・刊行図・測量図・編集図といった地図の形態と社会における利用目的や意義について検討することが必要であることを指摘した。

また、江戸図・江戸切絵図や近代東京の民間発行の都市図についても、とりわけ当時の人々の東京に対する地域認識あるいは都市の表現方法についてまとめた（Komeie2020）。ここでの重要な点は、19 世紀の江戸の風景が 20 世紀初めの東京の人々のなかにも生き続け、名所図・一覧図・鳥観図といった近代東京の絵地図を通して過去の江戸を眺めていたと考えられることである。

日本では、近代化・西欧化の進んだ首都東京においてさえも、陸軍の地形図のような近代的で測量された官製地図よりも、人々の都市認識・地域認識の観点では、刊行図・出版地図、測量図ではない絵画的な表現の地図、江戸図から引き継いだ画像表現が重要であった。一方、近代的な地図文化は西欧の文化でもあり、ロシアの都市図やアトラス類は基本的にすべて測量図である。絵図や鳥瞰図、風景画との関係がどのようなものなのか。日本とロシアにおける人々の地域認識は、その点からも大きく異なることが予想される。しかし、本研究ではそこまで明らかにできなかったため、今後の課題として残された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 米家志乃布	４．巻 52
２．論文標題 近代の名所図会にみる江戸イメージ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 法政地理	６．最初と最後の頁 109頁～124頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 米家志乃布	４．巻 16
２．論文標題 絵地図における<北方>へのまなざし－「みちのく」から「蝦夷地」へ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国際日本学	６．最初と最後の頁 85-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Shinobu　Komeie	４．巻 2
２．論文標題 The Cartographic Heritage of Tokyo	５．発行年 2020年
３．雑誌名 J-READING -Journal of Research and Didactics in Geography	６．最初と最後の頁 115-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 米家志乃布
２．発表標題 日本の歴史空間と「蝦夷地」像
３．学会等名 人文地理学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 米家志乃布
２．発表標題 絵地図にみる北方へのまなざし
３．学会等名 法政大学国際日本学研究所シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Shinobu Komeie
２．発表標題 Mapping Tokyo:Cartography and the Representation of the Capital of Japan in the 20th Century
３．学会等名 International Conference Tokyo and Venice as Cities on Water. Past Memories and Future Perspectives（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 米家志乃布	４．発行年 2021年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 250
３．書名 近世蝦夷地の地域情報‐日本北方地図史再考	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関